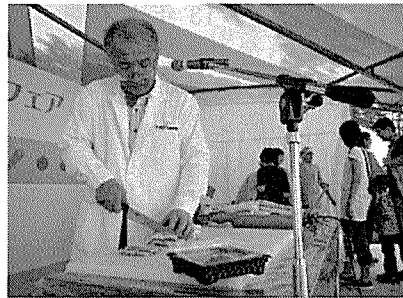


○ TOKYO Xが食育フェアに参加、飼料米給餌による美味しさ向上をアピール

東京都のブランド豚「TOKYO X」の販売流通事業者らで組織する「TOKYO X-Association」(植村光一郎会長)は12日、東京・渋谷区の代々木公園で開かれた「第7回東京都食育フェア」(東京都主催)に参加した。「楽しみながら食を育もう！」をテーマに2日間にわたって開かれた同イベント。アソシエーションは初日、特設ステージで植村会長が「究極の美味しさを探求」と題して、TOKYO Xの理念やブランド開発の経緯、さらに飼料米給餌による美味しさの向上についてプレゼンを行った。

植村会長は、TOKYO Xのこだわりである「安全・安心」「本来の生命の力を生かす」「動物福祉」「新しい品種・系統」の理念を説明、そのうえで、新たに取り組んだ飼料米の給与試験の結果を紹介した。枝肉の比較や理化学検査により、飼料米を給餌したことで豚肉のオレイン酸の含有量が増え、脂肪融点が低くなることが判明。専門家による試食・官



能検査でもそれを裏付ける結果になったことが報告された。また新たな指定飼料には、飼料米15%、さらに繊維質の多い飼料として

アルファルファミール2.5%とふすま10%が配合されるなどの特徴を述べ、優良遺伝系統に加えて新たな指定飼料の改善でより美味しい豚肉になったことを強調した。

プレゼン後は、植村会長自ら各部位からの商品化を実演＝写真。飼料米の入った指定飼料で育てたTOKYO Xの肉をしゃぶしゃぶにして150人に振る舞い、試食した聴衆からは美味しいと感嘆の声が上がっていた。植村会長によると、新たに飼料米を加えた指定飼料で育てたTOKYO Xが本格的に店頭で販売されるのは来春ごろの予定という。

○ ISO/TC34 総会に職員を派遣、規格提案の布石―農水省

農水省は、11月4～8日にシドニーで開かれるISO(国際標準化機構)/農産食品専門委員会(TC34)の総会に職員を派遣する。食品安全マネジメントシステムに関するISO22000シリーズ(s)を中心に今後の規格策定にあたって日本の食品業界の立場を積極的に反映させていくほか、食品産業にかかわる規格原案を新たに提案していきたい考え。規格原案は3年以内をメドに策定する方針で、すでに専門家らで構成する1回目の検討会を開いている。民間組織であるISOへの参加について、同省はこれまで消極的な立場にあった。輸出促進を図るにあたり、国際標準は、「ビジネスマナー」としての必須アイテム。国際標準の動きに振り回されるのではなく、ツールとして自在に使いこなすことができるかがグローバル展開のカギとなる。その意味では、規格の策定段階でどこまで日本が主導的な役回りを演じることができるかが、規格を積極的に活用する上で重要となってくる。

TC34は、農産食品に関する製品規格のほか、ISO22000sを担当する専門員会。「農水省としてはISOよりも、コーデックスに

重きを置いていた」(同省担当官)。「ISOを非政府組織であり、そこで作られるのはあくまでも民間規格だ」(同省幹部)。このため、ISO規格への関心は薄く、農林水産消費安全技術センター(FAMIC)を通じて情報収集を行ってきたに過ぎなかった。しかも、ISO22000の規格策定が進んでいた当時、同省はあくまでもISOのオブザーバーメンバーでしかなく、意見を積極的に発言できる主要メンバーではなかった。

同省は「攻めの農業」として輸出促進を掲げる中、グローバル戦略の一環として「国際標準化推進事業」に14年度から新規に取り組む方針を決めている。どちらかと言えば、国際標準に翻弄されてきた日本の食品業界。今後は、国際標準の考え方を逆手にとって、日本の立場が反映された規格づくりに関与していきたい考え。具体的には3年以内に食に関する規格原案を策定、ISOなど国際機関に積極的に提案することとしている。

今回の総会だけに限らず、TC34の下部組織である分科会(SC)にも継続して参加していく方針だ。